

第 396 号

寛永三年三月五日付け「豊嶋主膳正明重願文」
 (二同) 布川関係史料(5) には、「上原左衛門・
 島居善右衛門・塩見伊右衛門・金子長十郎・岩井勘
 右衛門」ほかの名前が記載されている。寛永二年
 八月の上記「家中衆」とほぼ同人とみてよいだろう。
 では「昨拝衆」と「家中衆」とは如何なる区分

申し込み：鎌田委員あてハガキかメールで

さらに「昨拝衆」の「昨拝」とは恐らく「策配」の「策」の字を充てることができらるだらう。中世後期に見える語彙であり、「支配」すること。取り扱うこと。采配。また、仲裁。調停。の意味をもつ（『国語大辞典・小学館』1981）。すなわち豊嶋家の「家政部門を運営する人たちと見ることが可能である。

因みに「大胡・柳下・野本」姓は慶長十五年段階から豊嶋氏の「昨拜衆」名字であり、戦国末期からの家臣たちと言ってよいだろう。寛永二年段階でも彼ら名字人四人は「昨拜衆」名字として筆頭に区別され記されていることも、以上の想定を補助するだろう。しいて推量すれば、上野武蔵に多い名字といえる（『姓氏家系大辞典』角川書店 1979）。まさに戦国末期、布川豊嶋氏が歩んだ後北条氏時代の様相を家臣・彼らの姿に読み込むことができるのではないだろうか。

武蔵豊島氏の末裔と伝承される豊島信満の刃傷事件を改めて様々な史料から振り返ってみてき

○一月例会及び七年度総会
一月二十五日(土) 生涯学習センター
総会は鎌田委員より令和六年度の会務報告。
予定通り年六回の例会を行い、参加者も昨年度
より増加した。会計報告では例会費用増(秩父
バス代)のため二万円程の赤字であったが、協
賛金をいただいたため残高は四十四万円と大幅
増になった。会員数は四十六名。
令和七年度例会日程

豊島信濃の出身を考えさせる史料に毛利家文書「北条氏人数覚書」（『神奈川県史資料編3下』中世976号）がある。そこに「十嶋 同（下総）ふ川の城 百五十騎」とある。さらに同文書「関東八州諸城覚書」（『同』中世970-977号）にも「ふ川の城 百五十騎」と見える。なお「小田原一手役之書立写」にも「ふかわ 豊嶋新六郎」とあるのも同じである（佐野家蔵文書と『上号』）。

これらは、小田原北条氏に属した関東地域の領主名とその規模を詳細に書き記したものであり、

○三月二十七日(木) 板橋区巡り大河勝正氏
○五月二十九日(木) 秩父札所巡り大河氏
○七月二十六日(土) 講演伊藤一美氏
○九月二十五日(木) 都内方面葛城明彦氏
○十一月二十日(木) 湘南方面伊藤一美氏

講演は八巻孝夫氏「日本人の苗字を考える」
日本の苗字は約二十九万種もあり世界有数の苗
字大国である。中国は二万種、韓国はなんと二
七四種という。世界一はアメリカで百万種以上
あるという。

その規模の正確性は驚くばかりである(「神奈川県史通史編」原始古代中世「神奈川県」。「ふ川」とは、現在の茨木県北相馬郡利根町・布川所在の中世城の一「府川城」の地区である(「日本城郭史大系」茨木県)。利根川左岸の微高地上で、佐竹・鎌倉街道にも接しており、水運と交易の重要拠点であったことが想定できる。現在は徳満寺の境内地であり、土塁・空堀や馬出曲輪などが残されている(同)。

この地区を支配していたのは、天正年間では豊島貞継であり、(水府志料天正3年霜月 日貞継判物写 1835号)、天正6年には職人福田氏に布川津での「穀船」[塩船]の計3艘を免許して

日本の苗字が多いのはその由来が「地名」からと
いうのが八五%もあること、同音異字が多いことな
どがあげられる。古代の氏と姓から中世では「字」あざな
が使われるようになり、地名を付けることで区別さ
れ、ふえていった。等々実に興味深いお話であつた。

当日の参加者 二十三名(うち非会員一名)

安保岡 一 上原菊枝 伊藤一美 入谷加代子
大河澄正 沖 武人 鎌田茂男 荻原由美枝
柴田辰子 栗原末江 鈴木 寛 柿島香也子
中平和成 藤原 徹 三井俊一 寺田千香子
本橋久世 八巻孝夫 中村みよし
中島正比古 船渡しげ子 水谷久美子